第７課獅子の洞窟から天使の洞窟へ

【暗唱聖句】

「大臣や総督は、政務に関してダニエルを陥れようと口実を探した。しかし、ダニエルは政務に忠実で、何の汚点も怠慢もなく、彼らは訴え出る口実を見つけることができなかった」ダニエル6:5

【日曜日・妬む人たち】

「ダニエルには優れた霊が宿っていたので、他の大臣や総督のすべてに傑出していた。王は彼に王国全体を治めさせようとした」ダニエル6:4

ダニエルの並外れた霊的能力により、王から厚い信頼を受けるようになると、他の役人から嫉妬されるようになりました。そこでダニエルに何か陥れる口実を探すのですが、ダニエルは政務に忠実で、何の汚点も怠慢もなく、彼らは訴え出る口実を見つけることができませんでした。ところで、この「忠実」という言葉は、「信頼できる」という意味の言葉です。忠実さは、信頼につながります。このダニエルの姿から、クリスチャンは忠実でなければならないことを学ばされます。しかし、この忠実さが、やがて罠に陥れるきっかけを作ってしまいます。ダニエルの忠実さは、神様に対してより一層強くあらわされていました。訴える者たちは、国への忠実さと神様への忠実さのどちらか一方を選び取るようにと罠にかけるのです。当然、ダニエルは神様を選びます。それは死を意味する行為でしたが、神様が大いなる奇跡をもってダニエルを救い出す感動的な場面へと続いていきます。聖書は、忠実な生き方を教えています。それは小さなことから始まり、やがて大きなものへと成長していきます。世の終わりが近づくとき、問われるのはこの神様への忠実さなのです。

【月曜日・ダニエルに対する陰謀】

「王国の大臣、執政官、総督、地方長官、側近ら一同相談いたしまして、王様に次のような、勅令による禁止事項をお定めいただこうということになりました。すなわち、向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる、と」ダニエル6:8

バビロニア帝国からメド・ペルシャ帝国に移行した後、ダレイオス王は広大な領土を効率的に治めるために、地方分権を実施することにし、そのため120人の総督を置くことにしました。そして、これらの総督の上に3人の大臣を立て、その一人がダニエルでした。その3人の大臣の中でも最も王が信頼をおき、国全体を治めさせたいと思ったがダニエルでした。そんなおり、ダニエルに嫉妬し、彼を陥れたいと考えていた者たちが、「向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる」という勅令を出すように王に進言します。国が代わり新しい王となり、その王に対する人民の忠誠心を試すためには良い方法に思われましたが、これがダニエルを陥れる罠だと気づいた時には時すでに遅しで、王であれ一度出した法律を簡単に無効にすることはできないのでした。

【火曜日・ダニエルの祈り】

「ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた」ダニエル6:11

この勅令が出た後も、ダニエルはいつものように二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげました。おそらく、開かれた窓からいつも祈っているダニエルの姿を、周囲の人々も見て知っていたのでしょう。ダニエルは窓を閉めて祈ることもできたでしょう。「隠れたところで祈っても、神様をみておられる」（マタイ6:10）との御言葉もありますから、それでも良かったわけです。しかし、このような王の勅令が出たことで、ダニエルは怯えたり、ひるんだりすることはありませんでした。それは、すべてのことを支配されているのは王ではなく、神様であることを知っていたからです。この世界は善と悪との大争闘の中にあり、これから世界がどうなっていくのかをすでに示されていたダニエルの目は、この世を超えた世界に向けられていたのです。

【水曜日・獅子の洞窟】

「彼らは王に言った。「王様、ユダヤからの捕囚の一人ダニエルは、あなたさまをも、署名なさったその禁令をも無視して、日に三度祈りをささげています」ダニエル6:14

訴える者たちは、ダニエルを所詮ユダヤの捕囚の一人に過ぎないことを強調し、禁令を無視したことを告げます。王がこれを聞いて「たいそう悩み、なんとかダニエルを助ける方法はないものかと心を砕き、救おうとして日の暮れるまで努力した」（ダニエル6:15）とあるので、本当にダニエルのことを思っていたことがわかります。しかし、一度発布したものを王であっても取り消すことはできなかったのです。王がダニエルに言える言葉は、ただ「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように。」（ダニエル6章17節）ということだけでした。もはや事態は、人間ではなく神の領域であるということです。ダニエルは何も語らず、静かに刑に服します。神様はダニエルが飢えた獅子の穴の中に放りこまれるのを許されました。なぜだろうと思います。しかし、そのことが結果的にさらに神様の偉大さ、救出の完璧さあらわすものとなっていったのでした。「吠えたける獅子のように、あなたがたの敵である悪魔が、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています」（1ペテロ5:8）と聖書には書かれてありますが、その悪魔を象徴する獅子でさえ神様の御前には猫のようにおとなしくなってしまうのです。

【木曜日・正当性の証明】

獅子から全く害を受けずダニエルが救出されたのを見て、王は喜び、そしてダニエルの信じる神様の栄光をたたえます。さらに彼は、全地に「この王国全域において、すべての民はダニエルの神を恐れかしこまなければならない。この神は生ける神、世々にいまし、その主権は滅びることなく、その支配は永遠。この神は救い主、助け主。天にも地にも、不思議な御業を行い、ダニエルを獅子の力から救われた」との書簡を送ったのでした。かつてのネブカドネザルに引き続き、再び王がダニエルの神様を証していくことになりました。これが果たしてどれほどの効果や影響があったのかは定かではありませんが、この書簡を受け取った人たちは、またもや王がこのような特定の国のしかも捕囚の民たちが信じる神様をほめたたえていることには、驚きを禁じ得なかったのではないでしょうか。ユダヤの神に興味を抱く者があったとしても不思議ではありません。

　ところで、ダニエルが獅子の穴から救い出された後、ダニエルを罠にかけ訴えた者とその家族が獅子の穴の中に投げ込まれてしまいます。かわいそうなのは妻や子供たちですが、これは当時の法律の則ったものです。聖書がそれを肯定しているわけではありません。ただ、家族内における父親の責任がいかに重大であるかがわかります。嫉妬や出世欲のようなものからダニエルを憎み陥れようとしたわけですが、その結果は家族全員に及んでしまったのです。これは今もある意味同じかもしれません。